りびんぐらいぶず　令和四年七月第三号

救いの御名のほとけさま　後段

◆ご讃題

阿弥陀仏の御名を聞き
歓喜讃仰せしむれば、
功徳の宝を具足して
一念大利無上なり。

（Ref. 讃阿弥陀仏偈和讃『第三十首、註釈版 p561）

◆はじめに

信心獲得のお心を秋の一日人生の悩みを抱えて当院をお訪ね戴いた真摯な青年のご縁で誕生した仏教讃歌「**ふとあおぎみるおすがたは**」にお尋ねして見ます。

青年は、行方も知らず足のむくままに当院をお訪ね下さいました。

気がつけば、掲示板の法語に見入っているご自身に気が付かれ、そのときお寺のご本尊を拝んでみたいとの思いにかられたとおっしゃいました。

「どうぞお入り下さい。」

すると青年は、本堂のご尊前に額ずき、それは丁寧にご本尊を合掌礼拝されました。

ところが、終って一言、◆「**どういうご利益がありますか**」とお訊ねになったのです。

拙速に利益を求めるのは現代人の姿ですね。

どうお応えしましょうね。

◆浄土真宗のご本尊

浄土真宗のご本尊は、その昔、インドの王舎城の韋提希夫人が大きな人生の悩みを抱えてお釈迦様に救いを求められ、

救いの法を説こうとお釈迦様がおっしゃっるや否や阿弥陀如来が空中にお立ち遊ばした**住立空中尊**のお姿を象っています。

お姿こそは、お喚び声になって現れ給う阿弥陀如来そのお方だったのです。

果たせるかな、青年が去った三ケ月後に讃歌「**ふと仰ぎ見るお姿は**」が現れ出て下さったのです。

一、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば六字と名告（なの）らして
となえてご覧と勧めます

二、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
されば私に称えさせ
耳に聞こえてよ喚（よ）び給う

三、ふと仰ぎみるおすがたは
すくいの御名（みな）のほとけさま
さればかさねてきかしめて
われをたのめとよびさます
なもあみだんぶ

◆如来様のお喚び声

◆如来様は、苦悩の衆生を救わんが為に、お手許で如来様のお浄土に生まれていく（今生では**摂取不捨**のお心に包まれる）如来様の行をお手建て下さって、お与え下さり「**さあ、称えてご覧**」とお勧め下さいます。

◆ご案内戴いたのですから「**さようか**」と頭を垂れてお念仏致しましょう。称えれば、直ちに南無阿弥陀仏と聞こえて下さいます。

そのとき聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそが、「**汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん（ワレニマカセヨ）**」との阿弥陀様の**お喚び声（これを本願招喚の勅命と申します）**だったのであり（二河白道）、仰せのままに「**さようか**」と頭を垂れる姿が如来様から賜る**信心**だったのです。

なる程、お勧めの儘に称えれば、直ちに私の上に如来様の大行が働き出され、南無阿弥陀仏のお喚び声が届いて下さいます。

如来様の仰せにお委せして称えたのですから、聞こえて下さったものこそは、如来様そのお方のお喚び声だったのでした。

◆新たなキャッチコピーの可能性

ところが今日、宗学で決していじってはならないといわれてきた浄土真宗のキャッチコピー「信心正因　称名報恩」をお伝えすることは容易ではありません。

信心正因は、親鸞聖人のみ教えですが、法の働きである称名を機受の信心獲得後に位置付けることに無理があったからです。

このため、今から九年も前に（２０１３年）ご門主と現御門主の御対談で、称名は、本願招喚の勅命としてお伝えしていかなくてはならないと**『浄土真宗のこれから』**で明らかにして下さったのです。

第十七願によれば、諸仏如来ならば、お名号の素晴らしさが分りますからこれを讃嘆なさいます。

それをお聞かせに与って衆生は「何と尊いことよのう、まことよのう、まことまこと」と讃仰させて戴くのです。

讃阿弥陀仏偈和讃第三十首に曇鸞大師のお徳をお讃え下さったご和讃があります。

阿弥陀仏の御名を聞き
歓喜讃仰せしむれば、
功徳の宝を具足して
一念大利無上なり。

称えれば聞こえて下さるお喚び声をお聞かせに与る聞名（信心獲得の道行き）は、**「称名聞名　歓喜讃仰」だったのですね。**

私達はすぐには信心獲得できませんが、お喚び声で喚び続けられれば、聞いて聞いて聞き抜く三昧の裡（うち）に終に目覚めることができます。聞こえて下さるお喚び声は、私の行の次元を超える如来様そのお方のお喚び声だったからです。

瓜生津隆眞先生は、妙好人木下マサさんの語録をひとつひとつひもとき、マサさんには、聞いて聞いて聞き抜いてゆかれた厳しいお聴聞があったとおっしゃいました。

◆親鸞聖人は**「聞即信」**と仰せ下さった。何ゆゑ**「聞即信」**と仰せ下さったか。

大経第十七願、第十八願にはなく、本願成就文に別の御言葉として現れる「聞」と「信」とを何ゆゑ一体のものとして取りあげる必要があったのか。

困難な課題ですが、不肖は、お軽さんのお歌、一蓮院秀存師、大厳和上のお歌から、次のように頂戴するようになったのです。

「信」は「疑蓋無雑」のネガティブ表現の儘ではプラクティスとしては難しいが、「聞」なら繰り返しによりやがて目覚める三昧の境地に導かれます。

お喚び声の主は阿弥陀様、衆生は其をお聞かせに与り、三昧の内に終に喚び覚まされるからです。衆生の常念仏は三昧です。

ただ一度であろうとも丁寧に合掌礼拝しどんなご利益がありますかと問うた青年の真摯な姿にうそいつわりはありません。何とかして其のお応えが見つかって欲しい。

問に対するお答えを探し求めて悶々とした三ヶ月が過ぎ去った頃、思いがけず**「ふと仰ぎ見るお姿は」**という讃歌になって現れ出て下さったのです。

それではこのご縁に皆様と一緒に讃歌をお歌い致しましょう。合掌。

◆令和四年七月三日十九時半　正覚寺仏壮お聴聞の会
◆令和四年六月十六日（木）十九時半　正覚寺仏婦例会
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166・FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥